



株式会社

# いろいろを 訪ねて

徳島県勝浦郡上勝町

かつうら かみかつちよう

六五歳以上の高齢者が半分以上を占める過疎の町。  
それが、「つまもの」を栽培・出荷する  
新しいビジネスによって蘇った。

高収入とやりがいを得て病人まで減ってしまった  
上勝町というどりの挑戦をレポートしよう。



株式会社いろいろ副社長の横石知二さんと、つまもの栽培で活躍する菖蒲清・増喜子さん夫妻。

取材・文 千葉望  
写真 栗原克己



## 「つまもの」を ビジネスにする 新発想で成功

徳島空港から車で一時間半。

だんだんきつくなる勾配こうばいの山道をたどっていく。ときどき集落が現れるが、これ以上奥に行くと大丈夫なのかとタクシーの運転手も迷うほどのところに、勝浦郡上勝町役場の建物が見えてくる。六五歳以上の高齢者が約半数を占める人口わずか二〇〇〇人の小さな自治体の本拠地。ここに、めざす「いろいろ」が入っているのである。いろいろは九九年に設立された第三セク

ター方式による株式会社である。

「いろいろ」とは珍しい名前だが、仕事の内容を聞いてみると不思議な命名ではない。日本の料理文化に欠かせないさまざまな「つま」として使われる花や葉を栽培し、注文に応じてパッキング、市場に届けるのだ。日本料理はほかの日本文化と同じく、季節を取り入れることをことのほか大切にす。梅がほころぶころになると、ちよつとした居酒屋では箸置きに梅の小枝があしらわれ、桜の季節には桜の趣向の料理が出される。夏、ガラス鉢に水を張り、青楓を浮かべてそうめんを供する。秋、紅葉の季節には皿に色づいた葉が

市場からの注文にあわせてさまざまな植物を出荷するのが(株)いろいろの事業。美しいツツジや桜のつぼみも、きちんと規格をそろえて清潔にパックされ、短時間で出荷されていく。栽培農家に蓄積されたノウハウは想像以上に高度で、他の追随を許さない大きな理由となっている。



敷かれて目を楽しませる。

以前はこのような「つまもの」は修業中の料理人が自分で山へ行き、探してくるものだった。

だが今ではそんな下積み仕事は嫌われるし、都市なら取りに行く場もない。

「それをうちが代行しているわけです」

というのはいろどりの副社長で実質的に指揮をとる横石知二氏である。横石氏はもともとJAの職員だった。徳島市に生まれ育ち、農業大学校を卒業後JAに入って指導員となった。



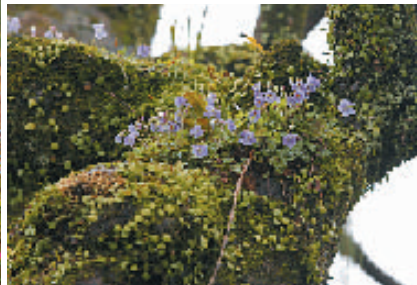
## 故郷を誇れない 農村の現状が 悲しかった

横石氏が振り返る。

「指導員といってもこっちは若造。徳島生まれだったから、農家の人たちも『よそ者が何を言う』という顔をして、なかなか溶け込むことができなかった。その頃は農家も疲弊していて、景色も全然違ったんだよ。雨が降ると役場に一升瓶を提げて集まってきた、ぼうつとして。『することがないけん、まあ飲めや』という感じで昼間から酔っ払っ

JA職員から今では(株)いろいろの副社長専任となった横石さん。事業が軌道に乗るまでは試行錯誤の連続で、体を壊したこともあったとか。





1年中市場ニーズに応じて、できるだけ高く売れる商品を出荷しようと、葛蒲さんの家でも庭先や畑でたくさんの植物を栽培している。庭先には苔むした立派な柿の木が。



いきいきした笑顔が若々しい増喜子さんは81歳。この仕事を始めてからすっかり元気になり、若返った。「会うたびに若くなる」とお嫁さんにも言われるという。増喜子さんたちの丁寧な仕事で、日本の季節感あふれる料理を支えている。

てた。当時の産業はみかん栽培と林業、建築業。どれも雨が降ったらでさん仕事やけん」  
日本の農村なら、どこでも見られる光景ではなかっただろう

か。平地の少ない山村となればなおさらである。また、女性たちのおかれた環境も厳しかった。男たちは一升瓶を抱えていればよいかもしれないが、農家の嫁

は家の中のこまごました仕事を担っている。家庭内の地位も低い（ここはあえて現在形で書かねばならない）。

「そうね。女の人たちは『こんなところに子供を置いとくときじゃない』という気持ちでがつついた。自分はたくあんをかじってでも、子供は東京や大阪のええ大学へやって、ええ会社へ就職さすんやと、みんな思うとった。米をこんなところで一反作ったって、数万円にしかならないわけよ。現金が足りなくて、いつも自分の気持ちが負けている。女の人は自分のお金なんて持てないもの。そういう意味では勝てることがない。自分が誇れることがない。これが全国、農村の現状です。だから人がいなくなるんですよ」

若い横石さんは、そういうお年寄りの姿を見て、寂しいと思った。自分の生まれた村を悪く言い、つらく寂しい顔をしている。何も輝きのない表情を見ると、横石さんまで暗い気持ちになった。

横石さんが赴任して数年後、

大寒波が上勝町を襲う。主要産業であるみかんの木は全滅。農家の人たちはさらに打ちのめされた。斜面に生えるみかん栽培はそれだけでなく重労働である。もういちど挑戦しようという意欲は生まれてこなかった。

## 生きがいのない生活が一変した女性たちの頑張り

これをなんとかしなければいけない。みかん以外に何かできることはないものか。思い悩む日々が続いた。ある日、大阪の鮨屋で食事をしていた横石さんの耳に、女性たちの声が飛び込んできた。彼女たちは料理に添えられた青楓の葉を、

「これかわいい！ もって帰りたいね」

と喜んで愛でていたのである。こんなものがかわいい？ いぶかしく思った横石さんに、ハタとひらめくものがあった。それなら上勝町で「つまもの」を栽培し、売ればよいではないか。さっそく、協力してくれる農家



のおばあちゃんたちと、ささやかなスタートを切った。もっとも協力者はわずかに四名。多くの人たちは疑いの目で見ていたという。

最初のうちは失敗続き。市場のことがよくわからなかったため、集める葉の質や切りそろえ方、パック方法、納品のタイミングなど、何もかも手探りで相手の要望に応え切れなかった。途中、研究のために自費で料亭めぐりをしていた横石さんが痛風をわずらうという悪いおまけもついた。そんなトライ＆エラーを続け、少しずつ実績を積み上げていった。この仕事はなんといっても農家の人に日銭が入る。最初関わってくれたのは女

性が多かったが、彼女たちは自分の収入を得ることで大きく変わっていった。「自分たちにもやればできる」という思いが支えとなった。

「僕がいくらつまものの可能性があるとんでも、みんな最初は信じてない。だって葉っぱばなあって、そこら中にあるもんでしょ。山菜ののびるだって、都会の人は喜ぶだろうけど、この人間は『なんだ、のびるか』って踏み潰していくんやけん(笑)。ところが事業が軌道に乗り始めると見方が変わってくるんやね。あって当たり前のものが立派な商品になるってことがわかった、目の色が変わり始めた」

以前は年金生活。子供たちに



納屋を改造して作った仕事場で、収穫された南天の葉をきれいにそろえて手早くパッキングしていく。部屋の中はすがすがしい南天の香りに満ちていた。増喜子さんは「今、働くのが楽しくてしかたがないよ」と笑顔でいう。



めんどろを見てもらい、診療所やデイサービスに出かける暮らしは、おだやかでも張りのないものだったろう。家の中の存在感も小さくなるばかりだ。だが生きがいが生まれる



と、みんな診療所どころではなくなかった。つまものと一口に言っても多種多様。自然に生えているものだけでは間に合わないの、自分の土地に売れ筋の植物を植え、手入れをする。生き物だから収穫のタイミングもむずかしい。

「酒やお茶を飲んで、近所の悪口を言ってる暇なんかなくなったんよ」

## 競争意識をかきたてることでやる気を引き出す

少しずついろいろな事業に参加する農家が増えてきたとき、横石さんは新しいしくみ作りに

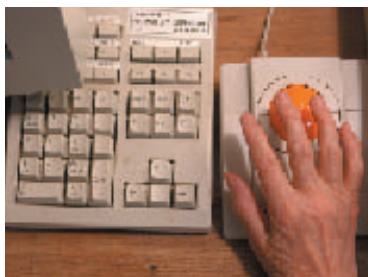


パック詰めされた植物はさらに10個ずつ箱に入れられ、集積場に運ばれる。ここから全国の市場に向けて出荷される。ファックスで全参加農家に注文を送ってからおよそ2時間ほどで、集積場に商品が集まってくる。

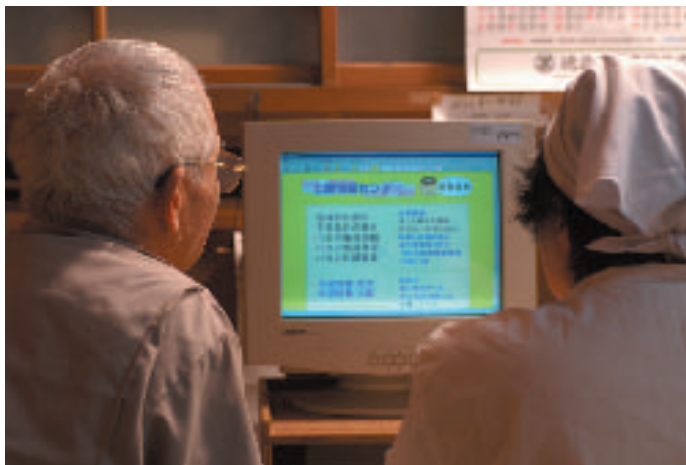


取り組み始めた。全国の各旅館や料亭から寄せられた注文を市場を通じて取りまとめ、防災無線を使って農家のファックスに同報する。それを見た農家では、どのつまものをどれぐらい納品するか、電話でJAに連絡を入れなければならない。この電話が競争なのである。

誰もが効率よく、高い価格の商品を納めようとする。早いも



高齢者でも使えるようにと、マウスではなく大きなボタン方式に改良されたパソコンを使いこなす菖蒲さん夫妻。画面を見れば各農家の売り上げや順位が一目瞭然。競争意識が引き立てられ、もっと頑張ろうという意欲が湧くしくみができている。



の順だから、すぐに電話をかけるが話中ことが多い。やっとつながったと思うと、ねらっていた商品はもうほかの誰かが納めることになっていたりする。

こうなると、もともと負けん気の強い農家の女性たちに火がつく。次はもっと早くやらなくてはと意欲が湧いてくるわけである。うまく注文が取れたときは

さっそく自分の畑

から商品となる植物を収穫し、規格にそって切りそろえ、パック詰めする。集積所に時間までに届けなければならぬので、ここでも時間との競争である。なるほど、むだなお茶飲みなどしてられないわけである。

またいりどりはインターネットを使った情報提供システム「いろいろネットワーク」も開始した。参加している農家の売り上げ状況が一目でわかる。自分の家の売り上げがそ

の月の何位になっているかもわかる。昨日は一位だったけれど、今日は三位に落ちたなどとわかると、俄然張り切る。なんだか、企業の営業マン管理システムを見ていたような気がする。

「そうやな。ある意味では競争をさせるというのは凄く大事だと思うから、モチベーションをあげることをねらってるんです。順位をつけることで、能力も上がっていく。情報で“気”を育てるとでも言うんかな。最初はそうやなかった。途中で『今のままではまずいな』と思うことが何度かあって、それで考えた。田舎の人はプライドが都会人より高い。隣にはぜったい負けとしないから。隣の状況が見えるから。隣が田んぼをしかけたらするし、家を建てたらうちも建てる。その負けん気がいい方向に向けば強いよ。実際、順位をつけだしてみたら、僕が思った以上にこだわる。ごっつい火花が散る(笑)。聞いてくるよ、『あの人、何番や?』って」

インターネットを取り入れてよかったことがもうひとつある。

それだけライバル意識が募っていても、直接顔を合わせなくてすむことである。家にいながらにして自分の位置がわかるため、余計な争いごともしまないのだという。

年収が一〇〇万円を超えることもあるというから驚きである。自宅や土地があるのだから、可処分所得は非常に大きい。都会で暮らす孫のためにマンションを買い与えたという話もある。高額所得でちゃんと税金も納め、元気で医療費もかからない。寝たきり老人はほとんどいなくなってしまった。人間にとって自立できる収入とやりがいのある仕事があれば大切なものか、考えさせられる話である。

## 仕事ですっかり 若返ってしまった おばあちゃん

一通り話を聞いたあと、横石さんが運転する車で、いろいろががんばる菖蒲さん宅を訪ねた。菖蒲家へ行く途中、美しい光景が一望にできる場所にさしかか





よこいし・ともじ  
1958年生まれ。79年、徳島県農業大学校卒業。上勝町農業協同組合へ営農指導員として入社。91年上勝町役場に転籍。株式会社いろどり(第三セクター)の責任者に就任。02年株式会社いろどりの取締役副社長就任。「アントレプレナー・オブ・ザ・イヤー」日本大会 特別賞」受賞。

ったため、横石さんが車を止めてくれた。ちょうど桜が満開の季節で、あちこちにピンクや白の薄雲のような桜が見える。一見自然に恵まれたのどかな山村のように思われるが、手のかかり方が違うことはすぐわかった。

家のまわりにさまざまな木々が植えられ、よく手入れがされている。桜にしても、都会のようにソメイヨシノだけ、八重桜だけの並木が続くわけではない。何種類もの桜が植えられている。市場のオーダーに応え、できるだけ長い期間納品できるようにするため。ここにはたしかにビジネスがある。

菖蒲さんの家ではご主人の清さん、奥さんの増喜子さんのふ

たり暮らし。増喜子さんは八十一歳だというが、とてもそうは見えない。

「だけど、増喜子さんはこの仕事を始める前、老けとったよ」と横石さんは言い、当時の写真を見せてくれた。たしかに今のほうがいきいきとした表情で若々しい。家の納屋部分を仕事場に改造し、その日も南天の葉をきれいに切りそろえてパック詰めに余念がなかった。仕事場に入ったとたん、すがすがしい香りに包まれた。南天はこんなによい香りだったか。「難を転じる」といわれる縁起物の南天は古来、喜ばれてきた。

「昔は親戚のところに行くとき、お赤飯やお鮓をこしらえてお重

(重箱)に詰めてもっていくんよ。そのとき南天の葉をそえたけど、あれは毒消しやろなあ」

増喜子さんは作業の手を休めずに、にこにこしながら質問に答えてくれる。「昨日、国債を買ったんよ」と横石さんに財テクの報告もしている。増喜子さんの手はつるつるだ。細かな手作業をすることによって、血行がよくなったのである。

部屋にはファックスとパソコンが置かれている。高齢者が簡単に使えるように工夫されたパソコンの前に座るとき、清さんと増喜子さんは正座をする。

「これがいちばん楽なんよ」

ふたりで顔を寄せ合って画面に見入りながら、自分たちの順位を確かめる目は真剣だ。毎日仕事を楽しんでいる増喜子さん。清さんも熱心に自宅周辺の植物の手入れをする。家の前には樹齢二〇〇年の柿の木があったが、秋になると色づいた柿の葉が立派な商品になる。

「長男の嫁が『お母さん、会うたびに若くなるなあ』と言うてくれてねえ」

と嬉しそうだ。八十一歳の増喜子さんはまだまだ若い。上勝町には九四歳で木に登り収穫する元気なおばあさんもいるのだ。役場に戻る道々、横石さんはこんな話をしてくれた。

「上勝町は『ゼロ・ウェイスト宣言(ごみゼロ)』をして、三四种類もの分別に取り組んどるんよ。これだって、以前ならやれといわれても『役場がやればいいじゃないか』と反発していたと思う。でも今は、町に誇りが持てるようになったから、それならもっといい町にしたいと思ってみんなやっとなんとちがうかな。最近は県外の若い人が上勝町に注目して、イターン希望者が増えてきた。それも優秀な子ばかり。デンマークに留学して環境問題を専攻したなんて子が、新しい町作りに力を発揮してる。これが嬉しいね」

町では、イターン希望者向けにマンション型住宅を建設した。若者が住みたがる町。誰もが願う町作りに成功しつつある上勝町の存在は、日本中に人間の生きる意味を提示しているのだ。